



プラス・ミュージアム・プログラム 2023年度クロージングフェスタ

(1) 2023年度成果報告会

「なのにあなたは小樽へゆくの」
ー「訪れる」だけじゃない！
「小樽芸術村」と小樽観光との関係を可視化するー

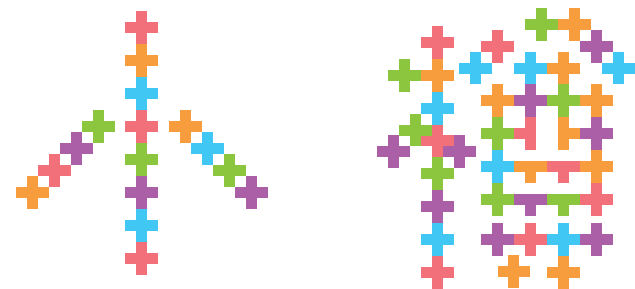


ミュージアムが持つ資源を活用して、
観光とどのような関係作りがこれから可能なのか。
評価学のプログラム評価の考え方をを用いて、
ミュージアムにおける
観光への役割・支援のあり方を考えます。

日時／ 2024年1月28日(日)10:00～11:30

会場／北海道大学学術交流会館 小講堂

報告者／石岡 麻梨子さん(㈱自然農園)
磯崎 亜矢子さん(公益財団法人 似鳥文化財団 小樽芸術村)
内沢 礼子さん(㈱LIXIL)
大洞 和彦さん(トヨタ産業技術記念館)
神 朱里さん(公益財団法人 似鳥文化財団 小樽芸術村)
矢野 ひろさん(㈱ノーザンクロス)
※ワークショップ
「ミュージアムと観光のあらたな関係を創造する」参加メンバー



ミュージアムはまちの常備薬

ーなにかと大変な世の中をちょっとだけ楽に、
あるいは楽しくしてくれる(かもしれない)、
ミュージアムというお薬の話ー

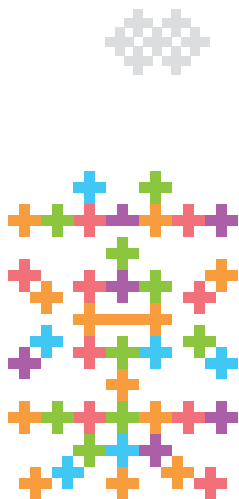
深刻な人口減少や地域の縮小、
自治体の財政難や災害との戦いなど、
日本各地の地域社会をとりまく
課題は少なくありません。
そのようななかであって、
ミュージアムの活動やコレクションは、
何をもたらすことができるのか。
社会の呼吸を楽にする、
ミュージアムの潜在力を再考します。

日時／ 2024年1月28日(日)11:30～12:00

会場／北海道大学学術交流会館 小講堂

報告者／今村 信隆(北海道大学文学研究院)

午前の部参加者合わせて40名



(2) 2023年度クロージングシンポジウム

Insight on Site

地域社会とともにあるミュージアムの現場に学ぶ

ミュージアムはこれまでに地域に根差した活動を展開してきましたが、
これからのミュージアムはより地域課題に向き合い、
社会全体に対して働きかけることが求められています。
ヒト、モノ、カネ、情報といった経営資源が限られている中、学芸員が中心となる
人的ネットワークや共通課題を基盤としたネットワークを通じて、
各館・学芸員が個性と専門性を発揮した多様な活動が行われています。
2023年度のクロージングシンポジウムでは、社会全体に情報を発信する
ミュージアムであるための必要な要素や全国の
ミュージアムにおける連携の現況と課題を俯瞰します。
さらに、関西圏および北海道内の小規模ミュージアムの活動に焦点を当て、
ミュージアムが地域社会に働き続けるために、
地域内外におけるミュージアムのネットワークが果たす役割と
ゆるやかに持続可能なネットワークのあり方について考えます。

日時／ 2024年1月28日(日)13:00～17:00

会場／北海道大学学術交流会館 小講堂

※Zoomを用いたオンライン配信を併用

開会の挨拶／藤田 健(北海道大学文学研究院院長)

基調講演／小川 義和(立正大学 教授・埼玉県立川の博物館 館長)
「地域においてミュージアムが連携する意義」

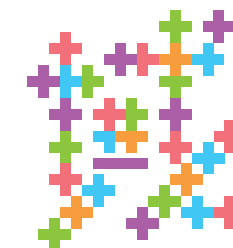
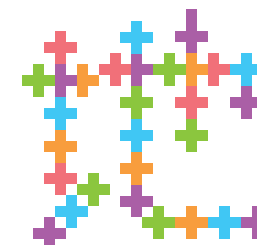
パネリスト／五月女 賢司(大阪国際大学 准教授)
尾曲 香織(北海道博物館学芸員・北海道博物館協会)
志賀 健司(いしかり砂丘の風資料館・北海道博物館協会 学芸職員部会)
卓 彦伶(北海道大学文学研究院 特任准教授)

閉会の挨拶／今村 信隆(北海道大学文学研究院 准教授)

司会／佐々木 亨(北海道大学文学研究院 特任教授)

参加者のべ74名

2023年度 クロージングフェスタ 全体参加者のべ105名





ヒトが繋ぐ先に、地域とミュージアム

原田 悠里(堺 アルフォンス・ミュシャ館 学芸員)

今回私は、美術資料を扱う、いち公立博物館学芸員として、「地域とつながりを持つミュージアム活動をしていく」にはどうすればいいのか、という個人的な問題意識を持って参加した。「連携」をテーマにした各内容を、私自身にも結びつけながら振り返ってみたいと思う。

小川氏の講演では、最初に近年のミュージアムの提言、制度変更の流れの中で、ミュージアムの機能・社会的役割が変化してきたことが改めて整理され、ネットワークによる連携によって社会課題解決へアプローチしていくあり方が重要視されていることが共有された。そして、小川氏が提唱している、連携において共有すべき3C（Content／資源の共有・Community／仕組みづくり、手立て、人材の共有・Context／課題・理念の共有）について、個別事例とともに紹介がなされた。事例の共通点は、学芸員には、各々の資料の専門性を保持しつつも各連携者をつなぐ、いわゆるコーディネーター的な役割がより求められてきているということである。

特に小川氏が強調していた、3Cの中でもContextにあたる「連携は目的ではなく手段である」ということは、連携事業を進める中で何度でも立ち返らなければならないと、私自身の経験からも学んでいる。当初しっかりと

共有されていたはずの「何のために連携するのか」という目的が、連携事業が進む中でいつの間にか各々の都合や利が優先されたり、事業の負担から、連携自体が目的に変わってしまうのである。

講演に関する質疑応答で一つ個人的に興味深い議論がなされた。

アメリカと日本の社会教育における、ミュージアムの重要性の認識の違いは何故かという質問から、小川氏はアメリカでは学校教育と社会教育を合わせて、教育プログラムができているのに対し、日本では学校教育制度が整いすぎているために、その補完としてミュージアムを含めた社会教育の必要性が薄れていると指摘した。しかしサードプレイスのな役割も含め、学校外の活動ができる可能性を示し続けていく必要性も述べていた。このことは学校や展示を通じて、子どもたちへの美術鑑賞をアプローチしながらも、継続的、日常的なミュージアム体験に結びつかないという、勤務館の課題の所在を捉え直す契機となった。

本来ミュージアムには、教科書を越えた学び、座学だけでは満たされない好奇心、実物資料を前にした感動、さらには親や先生以外の大人との関わり等、社会教育に必要な役割が内包されているはずである。しかしそれらで補完

する余裕がないほど、現在の学習指導要領が学校教育のカリキュラムで完結してしまっていることをより認識し、勤務館の特長を生かした働きかけを行う必要があるのだろう。

続く各報告では、まず尾曲氏による北海道博物館協会の組織運営について、詳細な説明により、道博協の事務局がいかに各団体と連携をとり、機能を維持しているかを知ることとなった。しかし淡々と組織の構造とご自身の立ち位置をご報告されながら、所属館の民俗担当学芸員として研究グループと展覧会担当も兼任しての事務局の業務ということ聞き、その業務量を推し量ると、同世代の学芸員として頭がさがる思いである。

また、志賀氏は、自身が関わる連携の規模ごとに4つの例を取り上げてくださった。中でも石狩市内の博物館のつながりである「館ネット」の紹介を聞き、市内館の連携というのは盲点だったと考えさせられた。私の勤務館のある自治体は3つのミュージアムを有するが、施設の運営・雇用形態がそれぞれ全く異なることもあり、個人の繋がりにとどまり、館同士のネットワークは機能していない。地域資料の扱いや所管課とのやり取り（重要）においても、同行政下にあるミュージアム同士の連携は必須のように思われる。

五月女氏の報告では、これから益々問題になってくる人口減少による市区町村立館を支える税收の減少問題を取り上げ、改めて地域と行政の理解を得て、内部資金を維持する重要性が示された。さらにそのような問題の共有も含め、全国の小規模ミュージアムのつながりを目的とした「小さいとこネット」が紹介され、主にメーリングリスト（以下ML）によるゆるやかなつながりが10年以上続いていることも伝えられた。

私も加入しているMLの参加者が、今や900人を超えていることにも驚いたが、日々の館内での困りごとから国際的なミュージアムの問題まで、日本全国の学芸員が共有、相談できる場として、MLが活発に運用されていることは、小さいとこならずとも各所で奮闘する学芸員にとっては、駆け込み寺のような役割もはたしているようにも思われる。

卓氏からは、ヒアリングをもとに、北海道各地の学芸員がいかにその地域の資料を生かし、活動の幅を広げているかが、報告された。個人のやる気や能力に頼るところが大きい事例もありながら、ミュージアムの本来の役割を連携という手段を用いて、地道に地域社会の中に浸透させていくことが、地域の理解を得るということにも繋がっている。

そして卓氏が最後に語った「個人がミュージアムに訪れて感じる心の動きこそ、ミュージアムがもつ価値である」という意見には、いちミュージアムファンとして賛同した。

現場で長く活躍されている(きた)学芸員の諸先輩方からの示唆は、大変励みになる一方で、今以上に学芸員という職に期待される役割の多さと重さには、正直複雑だ。すでに現場は、少数精鋭で以てしても疲弊が限界にきているところも多い。

しかしきっと、プラス・ミュージアム・プログラムが、現場の声に耳を傾け、事例を積み重ね、ミュージアム研究の中で地域とミュージアムの関係をつなぐ道筋を見つけて出してくれるであろうと期待している。

